

6) 軍陣歯科学 (第1報)

—三内軍医正, 口腔外科学—

The Military Dentistry (1st Report)

—Oral Surgery written by Dr. Sannai—

日本大学松戸歯学部 ○落合 俊輔
中村 一
坂元 雅明
出地 弘
谷津 三雄

Shunsuke Ochiai, Hajime Nakamura, Masaaki
Sakamoto, Hiroshi Shicchi, Mitsuo Yatsu,
Nihon University School of Dentistry at
Matsudo

陸軍軍医学校令は明治21年発令されたが、日露戦争を契機として大いに必要を認められ軍医学校に軍陣外科の一分科として口腔外科が加えられ、その教育に東京大学の石原久が任ぜられた。明治41年6月1日、陸軍軍医学校に診療部が開設されたが歯科は隔日交代に耳鼻咽喉科と教室を共用していた。明治42年1月陸軍軍医学校に初めて二等軍医岡島格が初代の口腔外科の専任教官に任ぜられた。大正5年陸軍軍医学校嘱託として口腔外科学を講じていた石原久講師が解職となり、口腔外科学の教育および診療は岡島教官の管理となった。大正7年岡島教官転出し、一等軍医三内多喜が第2代目教官となる。

昭和4年3月陸軍軍医学校は麴町区富士見町より牛込区戸山町（現国立医療センター）に移転した。昭和6年、満州事変の勃発となり、本事変における顔面顎部戦傷の陳旧性にして長期間の特殊治療を要する者は内地に送還され、臨時東京第一陸軍病院に収容し、軍医学校において手術や治療を行った。本事変において顎骨骨折に対する処置として各種の副木が考案され、いわゆる三内式線副子も開発された。昭和12年7月7日日支事変勃発、顎顔面戦傷患者が多くなり内地に輸送されてきた。事変1ヵ月後の昭和12年8月井上日英軍医大尉は三内軍医少将の後を継ぎ第3代目主任教官

となる。昭和13年4月井上日英少佐転出し、松本秀治中佐が第4代目口腔外科主任教官となる。昭和18年に第5代目の松本正直少佐が教官となり終戦となり陸軍軍医学校口腔外科は終止符を打つことになる。

三内軍医については上野正教授が「続々いわでもがな一老いの語りー」（昭和63年6月刊）の13ページに「三内氏は陸軍軍医に進まれ、軍医の最高位の少将まで昇進され、陸軍軍医学校の口腔外科主任をつとめられた。三内式線副子の開発グループのヘッドであった」と記載されている。

一方、第13回日本歯科医学会総会（中原実会頭）は“未来への歯学と歯科医療の調和”を基調テーマとして、帝国ホテル、日比谷公会堂、晴海貿易センター、そのほかを会場に、登録参加者13,000名のもと昭和48年9月22～26日にわたり盛大に開催された。

本総会の併催行事として9月23、24日の2日間にわたり晴海の東京貿易センターを会場として戦後初めての歯科医史展を鈴木先生、今田先生、河越先生、中上さんおよび日本大学松戸歯学部らが中心となり、日本全国の篤志家から借用した資料をもとに開催された。その時陸軍軍医学校に勤務したことのある中上さんが佐藤正一郎先生（前武蔵野赤十字病院副院長）や川又俊夫先生に呼びかけ陸軍軍医学校口腔外科で行った顔面、顎、口腔戦傷外科の写真や資料を展示することができた。その時の資料を中上さんが一時今田見信先生の会長室に置いてあったものを、日本大学松戸歯学部資料室での保存が最良の方法だと話し合いがついたからといって持参してきてくれた箱の中に「三内軍医正, 口腔外科学」という謄写版刷りの13ページよりなる小冊子がある。今回この「三内軍医正, 口腔外科学」を参考資料として軍陣歯科学史の一端としたい。

1～2ページに書かれた目次は横書きの日本語とドイツ語である。

歯科医学 Zahnheilkunde, Dentalgie, Odontologie

1. 歯科保存療法学

Konservierende Zahnheilkunde,

窩洞学 (Kavitäten Kunde) 根管療法学
(Kanalbehandlung)

充填学 (Fullungslehre) etc.

2. 歯科技工学

Technische Zahnheilkunde,

有床義歯及金冠継続架工学, 矯正学
(Orthodontie)

顎補綴学 (Chirurgische Prothese)
etc.

3. 外科的歯科学

Chirurgische Zahnheilkunde,

Stomatologie, Mundchirurgie

抜歯術, 顎及口腔領域ノ手術 etc.

4. 基礎的歯科学

Wissenschaftliche Zahnheilkunde

歯科解剖学, 生理学, 病理学, 細菌学,

医化学, 薬物学, 胎生学, 冶金学 etc.

しかし, 本文は縦書きで, 口腔外科学, 三内軍
医正, とあり「歯牙梗組織及歯牙軟組織ノ組織解
剖ノ概要 (特ニ診断治療的ニ肝要関係アル条項ヲ
指示)」からはじまっている. 次いで「軍隊ニ多発
スル歯科疼痛ノ病理各論, 診断及其ノ治療」「歯
牙疼痛ノ診断」「歯牙疼痛ノ療法」(対症的療法ト
根治的療法トニ就テ) などに分類されている.

7) 軍陣歯科学 (第2報)

—満州事変における歯科巡回診療時携行
材料に就て—

The Military Dentistry (2nd Report)

—On the Dental Materials of traveling
Dental Examination at the Manchurian
incident—

日本大学松戸歯学部 ○馬渡 亮司

大石 和久

吉田 和子

鈴木 邦夫

谷津 三雄

Ryoji Mawatari, Kazuhisa Ooishi, Kazuko
Yoshida, Kunio Suzuki, Mitsuo Yatsu,
Nihon University School of Dentistry
at Matsudo

川又俊夫 (陸軍軍医学校口腔外科, 主任松本秀
治教官) は「軍陣歯科の回顧—厚生歯科学會, 昭
和16年總會講演要旨—各戦役に於ける我が軍陣歯
科の変遷」において「昭和6年, 満州事変の勃発
となった. 事変当初にあっては派遣各大部隊に衛
生班が編成せられ, これに歯科医一乃至二配属と
なり, 歯科医は衛生班主力と行動を共にし各地に
診療所を開設し, 又単独にて遠隔の各部隊に出張
或は巡回診療を行った. 次いで現地に陸軍病院開
設せらるるや歯科医の採用配属となり或は衛生班
付歯科医の転属となって全満全軍の歯科診療に遺
憾なからしむるに至った. 歯科用衛生材料に就て
は, 衛生班は歯科医扱を携行し, 開設の陸軍病院
は病院用歯科器械を備付けた. 各地部隊への出
張, 巡回診療には馬車, 汽車, 船舶, 飛行機等あ
らゆる交通機関を利用し, 護衛を付け時には単独
にて分散せる各地の部隊に行動せり随って行動に
便なる様携帯行器械の重量及容積に最小限の制限
が行はれる. 治療椅子は出張, 巡回診療時には携
行用難にして現地に於て椅子等を適当に改造し或
は支那人理髪椅子を利用した. 尚, 治療椅子は普
通椅子に安頭台を考案付着して使用せり. 又, 支